熊大教育実践研究　第6号，97－107，1989

児童・生徒の発達段階からみた消費者教育（第2報）*
物の側面からみた検討

奥村美代子**・柚木美保***・宮瀬美津子***
岩下紀子***・宇野尚子***・岡部由紀子****

Consumer Education Corresponding to Development stages (Part 2)
Consumer Education : From the Standpoint of Materials Management

Miyoko OKUMURA, Miho YUNOKI, Mitsuko MIYASE
Noriko IWASHITA, Naoko UNO and Yukiko OKABE

(Received October 1, 1988)

A survey on material management was conducted in 1988. Subjects were 2450 school children and sutudents living in kumamoto city. The findings were as follow.

1. Subjects' consumer behavior became inadequately with the increase in their school age.
2. Their consiousness of resource management did not conform to their actual behavior.
3. A large portion of their consumer behavior was a result of their conforming behavior to their friends.

緒　言

前報[1]において，金の側面からみた児童•生徒の消費行動の実態について報告した．本報では，さらに物の側面からみた児童・生徒の消費行動について分析し，学校教育における消費者教育の教材化の基礎を得ることを目的とする．

物の側面を問題とするのは，主体的消費者育成の基本が物の消費のしかたに直結するためである．物に関する消費はすなわち地球資源の消費であり，わたくしたちの消費の仕方がいわゆる公害の原因にもなり得るという強い認識が必要である．

したがって消費者教育をすすめるためには，物に関する，児童・生徒の消費行動や意識の実態を把握することが重要であると思う．

* 本文の概要の一部は，日本家政学会九州支部大会（1987・11・8，尚絅短大）において発表した．
** 家政教育
*** 大学院教育学研究科
**** 附属中学校

方　法

調査対象　熊本市内及び熊本市近郊に住む公立の小学生・中学生・高校生を対象とした．なお，調査1及び調査2の対象者の概要は表1に示した．その詳細は前報と同様である．

表1　調査対象　（人）

	小学生	中学生	高校生	合計
第1回調査	375	595	502	1,472
第2回調査	228	367	383	978

表2　物に関する調査内容

第1回調査	●購入の動機	●紙の有効利用
	●食品選択の基準	●環境保全の態度
	●水の使用態度	●親の買い与え方
	●物の修理態度	●資源意識
第2回調査	●家の人の注意	●情報源
	●物の有効利用	●資源意識
	●級友の物の扱い	●副次的購入の頻度
	●級友の行動への関心	●友人に関連した消費行動

調査方法　調査に先だち，物に関する消費行動の望ましい在り方として物や資源に対する認識に基づいた，①主体性（情報に惑わされず本当に必要なものの価値判断ができる），②物の有効利用，③地球資源・環境の保全の態度が必要であると考えた．このような概念を基に調査項目を設定した．具体的な質問項目は表2に示す．調査分析の方法は前報と同様である．

結果及び考察

1．児童・生徒の消費行動の実態

(1)　物に関する消費行動の実態

購入の動機についての結果を表3に示した．全体的に「安売り・気にいった」，「必要に従って」の割合が高く，「必要に従って」は小学生40%，中学生32%，高校生25%と減少し，逆に「安売り・気にいった」は小学生44%，中学生46%，高校生52%，「友人につられて」は小学生8%，中学生10%，高校生14%と増加し，学校段階による差が認められた($P<.01$)．性別については，男子に「新製品」「必要に従って」が多く，女子に「安売り・気にいった」が多く，性差が認められた($P<.01$)．学校段階と性別の交互作用では有意な関係は認められなかった．

食品の選択基準についての結果を表4に示した．全体的に「おいしさ」が最も多く，次いで「安さ」「添加物」となっていた．「おいしさ」は小学生42%，中学生58%，高校生74%と増加し，「添加物がない」は小学生19%，中学生10%，高校生6%と減少していた．また，小学生は「おまけ」「店」「新製品」「容器」の割合が他の学校段階に比べ高かった．この結果，学校段階による差が認められた($P<.01$)．学校段階と性別の交互作用は認められなかったが，残差分析の結果，「量」は中・高校生・男子，「店」は小・中学生・男子，「容器」は小・中学生・女子，「新製品」「おまけ」は小学生・男子に多かった．

紙の有効利用に関する結果を表5に示した．全体

表3－1　購入の動機

		友人につられて	新製品	安売り・気にいって	必要に従って	無答	計
小学生	男子	14(7.0)$^{+}$	19(9.5)	76(38.2)$^{--}$	89(44.7)$^{++}$	1(0.1)	199
	女子	15(8.5)	7(4.0)$^{+}$	89(50.6)	61(34.7)	4(2.3)	176
中学生	男子	29(9.3)	31(9.9)	113(36.2)$^{--}$	122(39.1)$^{++}$	17(5.4)	312
	女子	36(12.7)	20(7.1)	162(57.2)$^{++}$	58(20.5)$^{--}$	7(2.5)	283
高校生	男子	30(13.2)	21(9.3)	106(46.7)	67(29.5)	3(1.3)	227
	女子	42(15.3)$^{+}$	16(5.8)	157(57.1)$^{++}$	60(21.8)$^{--}$	0(0.0)	275
小学生		29(7.7)$^{-}$	26(6.9)	165(44.0)	150(40.0)$^{++}$	5(1.3)	375
中学生		65(10.9)	51(8.6)	275(46.2)	180(31.9)	24(2.4)	595
高校生		72(14.3)$^{+}$	37(7.4)	263(52.4)$^{+}$	127(25.3)$^{--}$	3(0.1)	502
男子		73(10.0)	71(9.6)$^{++}$	295(40.0)$^{--}$	278(37.7)$^{++}$	21(28.5)	738
女子		93(12.7)	43(5.6)$^{--}$	408(55.6)$^{++}$	179(24.4)$^{--}$	11(15.0)	734
計		166(11.3)	114(7.7)	703(44.8)	457(31.0)	32(2.2)	1,472

残差分析による有意水準　$^{+}$又は$^{-}$P<.05，$^{++}$又は$^{--}$P<.01

表3－2　購入の動機の3要因尤度比検定

変動源	自由度 (df)	尤度比 (G^2)	P
学校段階(A)×購入の動機(C)	6	27.496	.01
性別(B)×購入の動機(C)	3	49.199	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	6	3.401	ns
全体	15	80.097	.01

表４－１　食料品の選択基準

		おいしさ	量	店	安　さ	容　器	添加物がない	新製品	おまけ	無　答	計
小学生	男子	76(36.7)$^{--}$	15(7.5)$^{++}$	15(7.5)$^{++}$	30(15.1)	2(1.0)	32(16.1)$^{++}$	15(7.5)$^{++}$	6(3.0)$^{++}$	11(5.5)	199
	女子	84(47.7)$^{--}$	5(2.8)	6(3.4)	28(15.9)	9(5.1)$^{++}$	38(21.6)$^{++}$	2(1.1)	1(0.5)	3(1.7)	176
中学生	男子	162(51.9)$^{--}$	34(10.9)$^{++}$	17(5.4)$^{+}$	43(13.8)	0(0.0)$^{--}$	36(11.5)	8(2.6)	2(0.6)	10(3.2)	312
	女子	179(63.3)	7(2.5)$^{--}$	6(2.1)	42(14.8)	12(4.2)$^{++}$	26(9.2)	7(2.5)	0(0.0)	4(1.4)	283
高校生	男子	161(70.9)$^{++}$	21(9.5)$^{+}$	2(0.9)$^{-}$	20(8.8)$^{-}$	0(0.0)$^{-}$	14(6.2)$^{--}$	7(3.1)	1(0.4)	1(0.1)	227
	女子	210(76.4)$^{++}$	6(2.2)$^{--}$	7(2.5)	29(10.5)	2(0.7)	18(6.5)$^{--}$	3(1.0)$^{-}$	0(0.0)	0(0.0)	275
小学生		157(41.9)$^{--}$	20(5.3)	21(5.6)$^{+}$	58(15.5)	11(2.9)$^{+}$	70(18.7)$^{++}$	17(4.5)$^{+}$	7(1.9)$^{++}$	14(3.7)	375
中学生		341(57.3)	41(6.9)	23(3.9)	85(14.3)	12(2.0)	62(10.4)	15(2.5)	2(0.1)	14(2.4)	595
高校生		371(73.9)$^{++}$	27(5.4)	9(1.8)$^{--}$	49(9.8)$^{--}$	2(0.1)$^{--}$	32(6.4)$^{--}$	10(2.0)	1(0.1)	1(0.1)	502
男　子		396(53.7)$^{--}$	70(9.5)$^{++}$	34(4.6)$^{+}$	93(12.6)	2(0.2)$^{--}$	82(11.1)	30(4.1)$^{++}$	9(1.2)$^{+}$	22(3.0)	738
女　子		473(64.4)$^{++}$	18(2.5)$^{--}$	19(2.6)$^{-}$	99(13.3)	23(3.1)$^{++}$	82(11.2)	12(1.6)$^{--}$	1(0.1)$^{-}$	7(0.1)	734
計		869(59.0)	88(6.0)	53(3.6)	192(13.0)	25(1.7)	164(11.1)	42(2.9)	10(0.1)	29(2.0)	1,472

残差分析による有意水準　$^{+}$又は$^{-}$P<.05，$^{++}$又は$^{--}$P<.01

表４－２　食料品の選択基準の３要因尤度比検定

変　動　源	自由度 (df)	尤度比 (G^2)	P
学校段階(A)×選択基準(C)	14	108.020	.01
性別(B)×選択基準(C)	7	80.115	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	14	17.180	ns
全　体	35	205.315	.01

的に「利用する」が多いものの，小学生77%，中学生59%，高校生56%と減少し，逆に「利用しない」は小学生22%，中学生40%，高校生43%と増加し，学校段階による差が認められた($P<.01$)．性別では女子に「利用する」が多く，男子に「利用しない」が多く，性差が認められた($P<.01$)．交互作用は認められなかったが，残差分析の結果，「利用しない」は中・高校生・男子に多かった．

その他の，水の使用態度・物を修理する態度・環境汚染の３項目に関する自由度・尤度比値・有意水準値を表６に示した．

水の使い方については「節約して使う」が小学生61%，中学生45%，高校生39%と減少し，逆に「無駄に使う」は小学生35%，中学生50%，高校生59%と増加し，学校段階による差が認められた($P<.01$)．性別では女子に「節約して使う」が多く，男子に「無駄に使う」が多く，性差が認められた（$P<.01$)．交互作用も認められた（$P<.05$)．

次に，物を修理する態度については，中学生に「修理しない」が多く，逆に「修理する」は小・高校生に多く，学校段階による差が認められた($P<.01$)．性別では，「修理する」は男女とも70%台と高い割合ではあるが男子に多く，逆に「修理しない」は女子に多く，性差が認められた($P<.05$)．交互作用は認められなかったが，残差分析の結果，「修理する」は小学生・男子，「修理しない」は中学生・女子に多かった．

環境保全の態度，“ゴミをゴミ箱以外に捨てたことがある”について，「時々する」は小学生69%，高校生65%に対し，中学生は76%を占め，「よくする」でも11%と多く，学校段階による差が認められた($P<.01$)．性別では，男子に「よくする」が多く，「女子」に「捨てない」が多く，性差が認められ($P<.01$)，交互作用も認められた（$P<.01$)．

以上の結果より，学校段階の進行に伴い消費行動の質が低下していることがわかった．また，性別に

表５－１　紙の有効利用

		利用する	利用しない	無答	計
小学生	男子	143(71.9)++	56(28.1)--	0(0.0)	199
	女子	147(83.5)++	28(15.9)--	1(0.5)	176
中学生	男子	168(53.8)--	142(45.5)++	2(0.6)	312
	女子	184(65.0)	98(34.6)	1(0.3)	283
高校生	男子	109(48.0)--	117(51.5)++	1(0.4)	227
	女子	173(62.9)	100(36.4)	2(0.7)	275
小学生		290(77.3)++	84(22.4)--	1(0.2)	375
中学生		352(59.2)-	240(40.3)+	3(0.5)	595
高校生		282(56.2)--	217(43.2)++	3(0.5)	502
男子		420(57.0)--	315(42.7)++	3(0.4)	738
女子		504(68.7)++	226(30.8)	4(0.5)	734
計		924(62.8)	541(36.8)	7(0.1)	1,472

残差分析による有意水準　+又は-P<.05，++又は--P<.01

表６　水の使用態度，修理する態度，ゴミ捨ての態度の３要因尤度比検定結果の要約

変動源	自由度(df)	尤度比(G^2)	P
学校段階(A)×水使用の態度(C)	2	49.420	.01
性別(B)×水使用の態度(C)	1	5.306	.05
交互作用(A)×(B)×(C)	2	6.802	.05
全体	5	61.528	.01
学校段階(A)×修理する態度(C)	2	11.958	.01
性別(B)×修理する態度(C)	1	4.249	.05
交互作用(A)×(B)×(C)	2	0.754	ns
全体	5	16.941	.01
学校段階(A)×ゴミ捨て(C)	4	80.141	.01
性別(B)×ゴミ捨て(C)	2	57.930	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	4	13.838	.01
全体	10	101.472	.01

表５－２　紙の有効利用の３要因尤度比検定

変動源	自由度(df)	尤度比(G^2)	P
学校段階(A)×紙の有効利用(C)	2	48.545	.01
性別(B)×紙の有効利用(C)	1	22.338	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	2	4.757	ns
全体	5	75.641	.01

よる相違も存在することがわかった。

(2)　資源の将来的展望

資源に対する将来的展望として食糧不足に関する結果を表７に示した。「起こらない」は小学生43%，中学生34%，高校生32%と減少し，逆に「起こる」は小学生19%，中学生30%，高校生37%と増加し，学校段階による差が認められた（$P<.01$）。性別では，女子に「わからない」が多く，男子に「起こる」が多く，性差が認められた($P<.01$)。学校段階と性別の交互作用は認められなかった。

環境汚染として“将来，街中にゴミがあふれる”かを尋ねた結果を表８に示した。学校段階による差は認められなかったが，性別では，男子に「起こらない」が多く性差が認められた($P<.01$)。交互作用も認められ($P<.01$)，残差分析の結果「起こらない」は高校生・男子に多く，「起こる」は高校生・女子に多かった。

その他の“水質汚染がおきる”“森林の枯渇がおきる”“エネルギーの不足がおきる”の質問に関する自由度・尤度比値・有意水準値を表９に示した。

“水質汚染”については「起こる」は小学生48%，中学生63%，高校生72%と増加し，逆に「わからない」は小学生35%，中学生24%，高校生16%と減少し，学校段階による差が認められた（$P<.01$）。

“森林の枯渇”については学校段階による差及び性差は認められなかったが，交互作用は認められ($P<.05$)，残差分析の結果高校生・女子に「起こる」が多かった。

“エネルギーの不足”については学校段階による差は認められなかった。性別では，女子に「わからない」が多く，男子に「起こらない」「起こる」が多く，性差が認められた($P<.01$)。交互作用も認められ（$P<.05$)，残差分析の結果中学生・女子に「わからない」が多く，高校生・男子に「起こらない」が多かった。

資源に対する将来的展望は，直接自分の身に関わってくる内容（食糧不足・水質の汚染）では学校段階の進行に伴い「起こる」と悲観的になるのに対し，環境に関する内容（ゴミ汚染・森林の枯渇・エネルギーの不足）では「起こらない」と感じている者が多かった。性別でも違いがみられ，全般的に男子に「起こらない」という楽観的傾向がみられ，女子に「わからない」という無関心な態度が多かった。

(3)　個人をとりまく環境

１）親の態度

親の態度として“子供の欲する物の買い与え方”

表７－１　食糧不足に対する将来的展望

		起こらない	わからない	起こる	無答	計
小学生	男子	90(45.2)++	62(31.2)	43(21.6)-	4(2.0)	199
	女子	72(40.9)	73(41.5)+	29(16.5)--	2(1.1)	176
中学生	男子	107(34.3)	98(31.4)	107(34.3)	0(0.0)	312
	女子	96(33.9)	115(41.0)+	72(25.4)	0(0.0)	283
高校生	男子	79(34.8)	60(26.4)--	88(38.8)++	0(0.0)	227
	女子	84(30.5)-	93(33.8)	98(35.6)+	0(0.0)	275
小学生		162(43.2)++	135(36.0)	72(19.2)--	6(1.6)	375
中学生		203(34.1)	213(35.8)	179(30.1)	0(0.0)	595
高校生		163(32.5)-	153(30.5)-	186(37.1)++	0(0.0)	502
男子		276(37.4)	220(30.0)--	238(32.2)+	4(0.5)	738
女子		252(34.3)	281(38.4)++	199(27.1)-	2(0.1)	734
計		528(35.9)	501(34.0)	437(29.7)	6(0.4)	1,472

残差分析による有意水準　+又は-P<.05，++又は--P<.01

表７－２　食糧不足に対する将来的展望

変動源	自由度 (df)	尤度比 (G^2)	P
学校段階(A)×将来的展望(C)	4	34.697	.01
性別(B)×将来的展望(C)	2	12.019	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	4	3.123	ns
全体	10	49.840	.01

と“物を大切にしなさいという注意”についての結果を図１に示した．全体的に「なかなか買ってくれない」「大切にしなさいという」が80％以上を占めるが，学校段階の進行に伴い減少し，学校段階による差が認められた（$P<.05$）．性別では「なかなか買ってくれない」は男子に多く，「大切にしなさいという」は女子に多く，共に性差が認められた（$P<.05$）．学校段階と性別の交互作用は認められなかったが，残差分析の結果「なかなか買ってくれない」は小学生・男子に多く，「大切にしなさいという」は中学生・女子に多かった．

以上の結果より，親の態度は学校段階による変化が少なく，大多数の親は子供の要求する物の購入に慎重で，日頃から子供に物を大切にするよう説いていることがわかる．また女子は要求する物をすぐ買ってもらう傾向があるが扱いに対する注意も受けていることがわかる．この傾向は特に中学生・女子にみられた．

２）級友の消費行動

級友の“掃除道具の取扱い”と“それに対する関心”についての結果を図２に示した．「大切にされている」は小学生75％，中学生52％，高校生60％，「粗末に扱っていたら注意する」は小学生72％，中学生49％，高校生15％と減少し，共に学校段階による差が認められた（$P<.01$）．性差はいづれも認められなかったが，交互作用は“掃除道具の取扱い”のみ認められ（$P<.01$），残差分析の結果「大切にされている」は小学生及び高校生・女子に多く，中学生及び高校生・男子に少なかった．

以上の結果より，級友の消費行動に対する評価は小学生が高く中学生は二分されていたといえる．また学校段階があがるにつれ相互の注意が減少したことから，高校生になると級友のよくない行動でも黙認する消極型が増加しているといえよう．

３）買物に際し参考にする情報源

商品購入時の参考として“家族の意見”“友人の意見”“学校で習ったこと”の利用程度について図３に示した．「よく参考にする」をみると，“家族の意見”

表8－1　環境に対する将来的展望

		起こらない	わからない	起こる	無答	計
小学生	男子	51(25.6)	46(23.1)	100(50.3)	2(1.0)	199
	女子	43(24.4)	39(22.2)	91(51.7)	3(1.7)	176
中学生	男子	65(20.8)	64(20.5)	182(58.3)	1(1.0)	312
	女子	51(18.0)	75(26.5)	156(55.1)	1(0.1)	283
高校生	男子	65(28.6)$^{++}$	55(24.2)	104(45.8)$^{--}$	3(1.3)	227
	女子	34(12.4)$^{--}$	68(24.7)	172(62.5)$^{++}$	1(0.1)	275
小学生		94(25.1)$^{+}$	85(22.7)	191(50.9)	5(1.3)	375
中学生		116(19.5)	139(23.4)	338(56.8)	2(0.1)	595
高校生		99(19.7)	123(24.5)	276(55.0)	4(0.1)	502
男子		181(24.5)$^{++}$	165(22.4)	386(52.3)	6(0.8)	738
女子		128(17.4)$^{--}$	182(24.8)	419(57.1)	5(0.7)	734
計		309(21.0)	347(23.6)	805(54.7)	11(0.7)	1,472

残差分析による有意水準　$^{+}$又は$^{-}$P<.05，$^{++}$又は$^{--}$P<.01

表8－2　環境に対する将来的展望の3要因尤度比検定

変動源	自由度(df)	尤度比(G^2)	P
学校段階(A)×将来的展望(C)	4	5.617	ns
性別(B)×将来的展望(C)	2	11.316	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	4	15.105	.01
全体	10	32.038	.01

表9　水質汚染，森林枯渇，エネルギー資源に対する将来的展望の3要因尤度比検定結果の要約

変動源	自由度(df)	尤度比(G^2)	P
学校段階(A)×将来的展望(C)	4	55.390	.01
性別(B)×将来的展望(C)	2	5.294	ns
交互作用(A)×(B)×(C)	4	3.065	ns
全体	10	63.749	.01
学校段階(A)×将来的展望(C)	4	4.713	ns
性別(B)×将来的展望(C)	2	0.932	ns
交互作用(A)×(B)×(C)	4	10.489	.05
全体	10	16.134	ns
学校段階(A)×将来的展望(C)	4	7.180	ns
性別(B)×将来的展望(C)	2	12.183	.01
交互作用(A)×(B)×(C)	4	10.341	.05
全体	10	29.704	.01

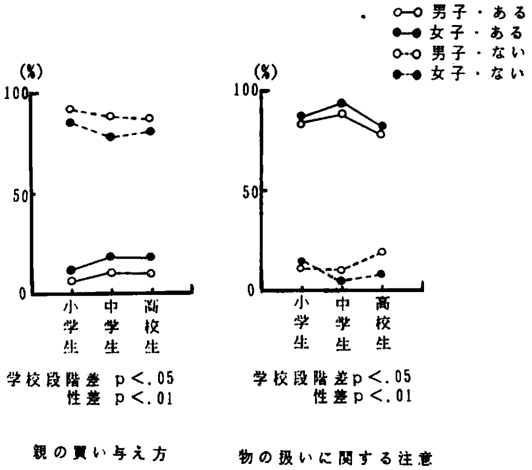


図1　親の態度

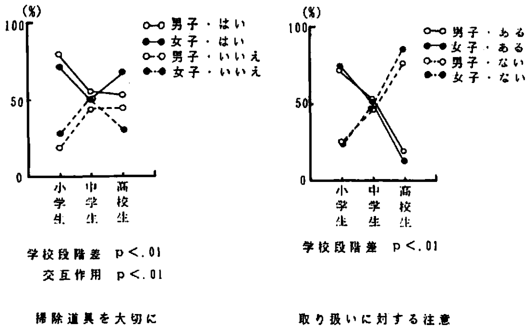


図2　級友の消費行動

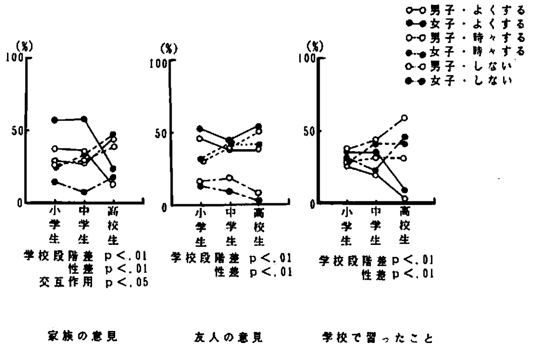


図3　買い物に関する情報の参考状況

“学校で習ったこと”は学校段階の進行とともに減少するが“友人の意見”では変化がなかった。「時々参考にする」では“家族の意見”“友人の意見”が学校段階とともに増加した。「全く参考にしない」では“家族の意見”“学校で習ったこと”は学校段階の進行とともに増加し，逆に“友人の意見”は減少していた。この結果，学校段階による差が認められた（$P<.01$）。性別ではいづれも女子に「よく参考にする」が多く，性差が認められた（$P<.01$）。交互作用は“家族の意見”のみ認められた（$P<.05$）。残差分析の結果，「よく参考にする」は“家族の意見”“学校で習ったこと”で小・中学生・女子に多く，“友人の意見”で高校生・女子に多かった。「時々参考にする」は“家族の意見”“学校で習ったこと”で高校生・女子に多く，“友人の意見”で高校生・男子に多かった。「全く参考にしない」は“家族の意見”“学校で習ったこと”で高校生・男子に多く，“友人の意見”で小・中学生・男子に多かった。

以上の結果より，商品購入時の参考は学校段階の

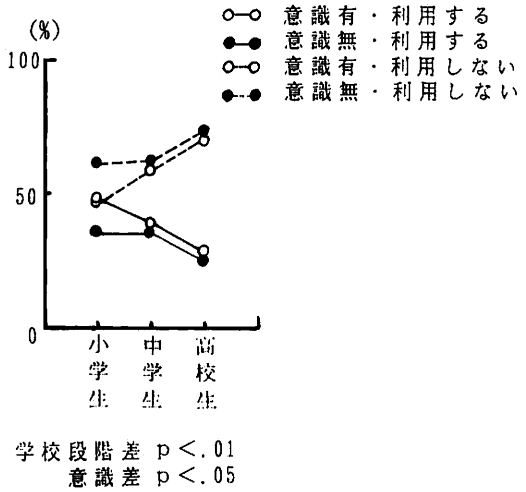


図4　資源意識と物の有効利用の関係

進行とともに“家族の意見”“学校で習ったこと”より“友人の意見”が重視される傾向にあり，特に高校生・男子に多く，小・中学生・女子に少ないといえる。また3項目とも女子はよく参考にしていることがわかる。

以上の児童・生徒の実態から消費行動の質の低下や意識と実態の乖離が認められた。その原因として，個人に内在する資源意識と消費行動との関係が希薄であることが考えられる。また，発達段階を通して親の態度は変わらないが友人との関わりは増大する傾向にあった。増渕・武井による実態調査でも「児童・生徒の消費行動は家族の消費行動や家庭教育に影響されていない」[2)]と報告されている。

2．資源意識と消費態度

資源意識と消費行動との関わりのクロス分析で以下のことがわかった。

水の使用時・飲食時・スプレー使用時に何を考えるかを記述してもらい，その結果を資源意識の有る者と無い者とに分類したところ，資源意識の有る者は小学生56%，中学生65%，高校生45%であった。この実態をふまえ，資源意識の有無と物に関する消費態度との関係を調べた。

(1)　意識の有無と物の有効利用

物の有効利用についての結果を図4に示した。学校段階があがるにつれ「有効利用する」は小学生44%，中学生39%，高校生28%と減少し，学校段階による差が認められた（$P<.05$）。意識の有無による差では「有効利用する」は意識の有る者に多く，意識

表10　資源意識と副次的購入の頻度の関係

		おまけ		点数券		容器		新製品		ブランド	
		(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)
よくする	小学生	＋＋	＋＋		＋＋		＋		＋		＋
	中学生	−−	−								
	高校生	−	−	−	−					−−	
時々する	小学生	＋＋	＋＋			＋＋	＋				
	中学生	−				−−	−	−−			
	高校生					＋		＋			＋
しない	小学生	−−	−−	−	−−	−−	−−				
	中学生	＋＋	＋			＋＋	＋	＋＋			
	高校生	＋＋	＋＋	＋	＋						

註）(A)は資源意識のある者，(B)は資源意識のない者である。
　　残差分析による有意水準　＋又は−P<.05，＋＋又は−−P<.01

による差が認められた（$P<.05$）．学校段階と意識の交互作用は認められなかったが，残差分析の結果，「有効利用する」は小学生•男子に有意に多く，高校生に有意に少なかった．

(2)　意識の有無と副次的購入の頻度

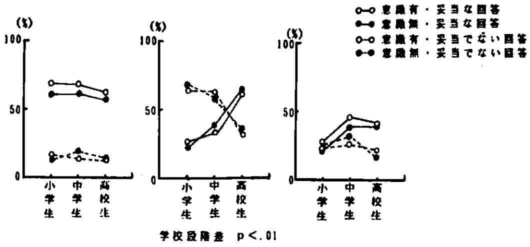
ここでは商品の付加価値を得るための副次的購入の中で“おまけほしさ”“点数券ほしさ”“容器や袋ほしさ”“新製品ほしさ”“キャラクター・ブランド商品ほしさ”をとりあげ，各品目と資源意識のクロス集計を行い，それぞれの残差分析の結果を表8に示した．

いずれも学校段階による差が認められ（$P<.01$又は $P<.05$），「よく買う」は全ての品目で小学生が有意に多く，特に“おまけ”“点数券”は学校段階があがるにつれて減少していた．また「時々買う」は“容器や袋”“新製品”“キャラクター・ブランド商品”で高校生が有意に多かった．意識の有無による差は，“おまけ”のみに認められ（$P<.05$），「よく買う」は意識の無い者に多かった．他の4品目では有意差はないものの，同様の傾向にあった．学校段階と意識の交互作用はすべて認められなかった．

以上の結果より，小学生は副次的購入が多く中学生に少ないこと，また高校生は“容器や袋”“新製品”“キャラクター•ブランド商品”の購入の多いことがわかった．また意識の無い者ほど購入頻度が多い傾向にあった．

(3)　意識の有無と所有タイプの分類

“セーター”“肌着”“ラジカセ”“筆箱”“傘”それぞれの必要数・所持数・耐用年数を妥当な回答と妥当でない回答に分類し，資源意識とのクロス集計を行った．ここでは妥当な回答に着目した結果，①平行型（学校段階の差がほとんどないもの）②上昇型（学校段階の進行に伴い増加するもの）③中高型（中学校のみに特徴のあるもの）が得られ，その代表例を図5に示した．



平行型（肌着の必要数）上昇型（筆箱の所持数）中高型（ラジカセの耐用年数）

図5　所有タイプの分類

①平行型－“肌着”の必要数・所持数

妥当な回答は必要数63%に対し，所持数45%と所持数の割合が少なかった．意識による差は認められなかったが，必要数では意識の有る者に妥当な回答が多く，所持数では意識の無い者に妥当な回答が多い傾向にあった．学校段階と意識の交互作用は認められなかった．

②上昇型－“セーター”“ラジカセ”“筆箱”“傘”の必要数及び所持数

いずれも学校段階の進行に伴い，妥当な回答が増加し，“セーター”の必要数を除き学校段階による差が認められた($P<.01$)．意識による差は認められなかったが，必要数では意識の有る者に妥当な回答が多く，所持数では意識の無い者に妥当な回答が多い傾向にあった．学校段階と意識の交互作用は認められなかったが，残差分析の結果，妥当な回答が有意に多かったのは，必要数では“ラジカセ”に中学生・意識の有る者，“筆箱”“傘”に高校生であった．所持数では，妥当な回答は４品目すべてにおいて高校生が有意に多く，小学生・意識の無い者が有意に少なかった．

③中高型－“セーター”“肌着”“ラジカセ”“傘”の耐用年数

耐用年数を短く答えている者は中学生で最も多くなっていた．全体的に“ラジカセ”“筆箱”は妥当な回答が多く“セーター”“傘”は短期間の回答が多かった．“ラジカセ”“傘”のみ学校段階による差が認められた（$P<.05$，$P<.01$）．意識別でみると，短期間の回答は意識の無い者に多い傾向にあった．学校段階と意識の交互作用は認められなかった．

以上の結果より，平行型，上昇型，中高型のいづれにおいても必要数及び耐用年数の妥当な回答では資源意識の有る者が多く，所持数の妥当な回答では資源意識の無い者が多かった．ここで，“肌着”のみに平行型があらわれたのは，物の特性によると考えられる．また他品目の必要数・所持数の妥当な回答が上昇型となったのは，第１に生活経験が違うため，第２に小学生は量的なものに，高校生は銘柄や好み等と満足の求め方が異なっているためと考えられる．耐用年数に関する中学生の認識は，物により開きがあるといえよう．

すなわち小学生は物の有効利用等日頃から禁止・抑制がなされる消費行動に関しては，資源意識の影響がみられたが，副次的購入等個人の主体的判断にまかされている行動に関しては，資源意識の影響はあまりみられなかった．一方，中・高校生は資源に対する認識はあるものの，意志決定に際しては小学生よりもその影響が少ないように思われる．これは，中・高校生の社会生活が広がり，友人からうける影響が強く，資源意識の影響が及ばなくなるためと推察される．

３．友人関係のもたらす影響

第１報ですでに述べたように，友人と関連した消費行動は学校段階の進行とともに増加し，特に女子は友人の強い影響を受けていることがわかった．また友人間で中心的存在と思っている者ほど友人の影響を受けた消費行動をとっていることがわかった．そこで友人関係に伴う性格特性と消費行動との関連についてさらに検討した．

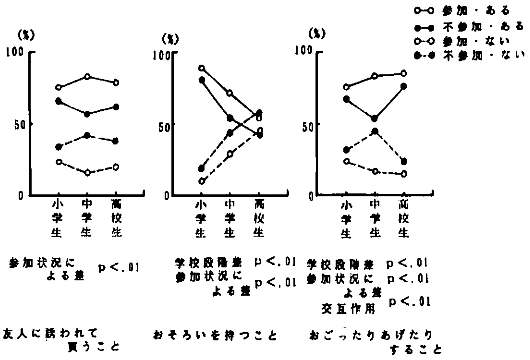


図６　流行への参加と友人に関係した消費行動との関係

友人間における流行への参加状況別の結果を図６に示した．“友人に誘われて買う”“おそろいを持っている”“おごったりあげたりする”の３項目すべてに参加状況別による差が認められ($P<.01$)，流行に参加しやすい者ほど友人に影響された行動が多かった．また“おごったりあげたりする”で学校段階と参加状況の交互作用が認められた($P<.01$)．他の項目では交互作用は認められなかったが，残差分析の結果，“友人に誘われて買う”は中・高校生の参加する者に多く，“おそろいを持っている”は小・中学生の参加する者に多くみられた．

次に性格特性と副次的購入との関係を表11に示した．まず“流行に参加する”あるいは“中心的存在と思っている”者についてみると，小学生は「よくする」がほとんどの項目で多く，中学生は“点数券”“キャラクター・ブランド商品”に多くみられた．高校生は「時々する」が“容器や袋”“新製品”“キャラクター・ブランド商品”で多くなっていた．“流行に参加しない”あるいは“従属的存在と思っている”者についてみると，「よくする」「時々する」が小学生では“おまけ”“点数券”“容器や袋”に多く，中・高校生では“新製品”“キャラクター・ブランド商品”に多くみられた．すなわち，中心的存在と思っている者や流行に参加する者ほど，副次的購入が多かった．しかし，小学生は中・高校生ほど性格特性による影響がみられず，学校段階により副次的購入の品目が異なっていた．

表11　友人特性と副次的購入の関係
流行に参加する者・中心的と思っている者

		おまけ		点数券		容器		新製品		ブランド	
		(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)
よくする	小学生	＋＋	＋＋		＋＋		＋＋		＋＋	＋	＋＋
	中学生		−	＋						＋	
	高校生	−−									
時々する	小学生	＋＋	＋＋			＋＋	＋＋				
	中学生			＋		−		−			
	高校生					＋		＋＋	＋＋	＋＋	
しない	小学生	−−	−−	−	−−	−−	−−		−−		−
	中学生			−−				−			
	高校生	＋＋			＋			−−	−−	−−	−−

註）(A)は参加するもの，(B)は中心的と思っているものである。

流行に参加しない者・従属的と思っている者

		おまけ		点数券		容器		新製品		ブランド	
		(C)	(D)	(C)	(D)	(C)	(D)	(C)	(D)	(C)	(D)
よくする	小学生		＋＋	＋＋							
	中学生	−−	−							−	
	高校生	−	−−	−−	−−				−	−	−−
時々する	小学生	＋＋	＋＋			＋＋	＋				−
	中学生	−−	−			−−	−−	−−	＋＋		
	高校生	−	−−	−					＋		＋
しない	小学生	−−	−−	−−	−	−−	−				
	中学生	＋＋	＋＋	＋		＋＋	＋＋	＋＋	−−	＋＋	
	高校生	＋＋	＋＋	＋＋	＋＋			＋＋		＋	

註）(C)は参加しないもの，(D)は従属的と思っているものである。
残差分析による有意水準　＋又は−P<.05，＋＋又は−−P<.01

友人に影響された消費行動や副次的購入等の問題行動は，同調行為の１つの現れと考えられる．乗本秀樹はこの現象を「子供たちは意識するしないにかかわらず，さまざまな集団や社会（中略）に帰属している．それぞれの集団や社会には固有の消費シンボルが形成されており，子どもたちはそのシンボルに帰依することによりーシンボル化された財・サービスを消費することによりー集団や社会への帰属を確認しようとする[3]」と述べている．これは，級友のよくない消費行動を黙認してまで友人関係を円滑に保つ姿勢からもうかがえた．また友人による情報は物の本質を見極めるためでなく，話題づくりや帰属意識の昂揚としての役割を持つようになっていると考えられる．

以上のような実態から，今後，教材化を計るためには，まず教材は児童・生徒の資源意識が実際の行動に結びつくようにし，発達段階に対応した身近な内容とする．次に児童・生徒は同調行為によって心理的満足を得る傾向があることを考慮し，消費者情報や消費財に対して主体的な意志決定をするだけでなく，対人関係においても主体性をもつ必要があることを認識させる等の視点について考慮する必要があるといえよう．

要　　約

1987年9月，1988年7月に，熊本市内及びその近郊の小学生，中学生，高校生の計2450名を対象に質問紙による物の側面からみた消費行動に関する調査を行ったところ，以下の点が明らかとなった。

1．学校段階があがるにつれて，消費行動の質が低下していた。

2．資源意識は必ずしも消費行動に反映されていなかった。

3．友人との同調行為による消費行動が多かった。

参考文献

1）奥村美代子他：「児童・生徒の発達段階からみた消費者教育（第1報）－金銭の側面からみた検討－」，熊本大学教育実践センター紀要（現在投稿中）

2）増渕哲子・武井洋子：「児童・生徒の消費行動（第1報）－衣生活領域について－」，日本家庭科教育学会誌　31　2（1988）

3）乗本秀樹：「消費の構造性と家庭科教育の展開」，三重大学教育学部研究紀要　37　（1986）